

腸管出血性大腸菌感染症 (O157)

Q.1 腸管出血性大腸菌感染症とはどのような病気ですか。

- 食品(生肉や野菜など)や水を介して、特定の大腸菌(腸管出血性大腸菌)に感染した場合に発症し、無症状や軽症で終わるものがほとんどですが水様の下痢、激しい腹痛、大量の鮮血便、嘔吐、高熱とともに、ときには重症になることもあります。
- 多くの場合は、感染してからおおよそ3~8日あとに頻回の水様便で発病します。
- これら症状のある方の6~7%が、初発症状の数日から2週間以内(多くは5~7日後)に溶血性尿毒症症候群(HUS)や脳症などを発症するといわれています。溶血性尿毒症症候群とは、尿量の減少、血尿、蛋白尿などを起こす状態で、意識障害や神経症状などを伴い、子どもと高齢者に起こりやすいです。

Q.2 腸管出血性大腸菌感染症にかからないためにはどうすればいいのですか。

- 食中毒の一般的な予防方法(P.8)を守り、患者と濃厚な接触を避けましょう。
- レバーなどの食肉を生で食べることは控え、加熱不十分な食肉(牛タキなど)を乳幼児やお年寄りには食べさせないようにしましょう。
- 食品や水のほか、患者や保菌者の便を介し、少ない菌量でも感染するため、患者や保菌者の便で汚染した衣類、寝具、おむつは、塩素系漂白剤にひたしてから洗濯しましょう。
- 患者さんは、排便後は、せっけんをよく泡立てて流水で手を洗ったあと、消毒用アルコールで消毒しましょう。また、患者さんや保菌者の排泄物などの世話をしたあと十分に手を洗いましょう。
- 入浴やプールでも、周囲に感染させることがあるため、医師に相談し、菌が出なくなるまで、入浴やプールは控えましょう。
- 飲食店に従事している方で調理従事者など直接飲食物に触れる業務の方は、検便で菌が検出されなくなるまで業務の変更などが必要です。

Q.3 腸管出血性大腸菌感染症にかかったらどうすればいいのですか。

- 安静にし、水分を補給し、消化しやすい食事を摂取します。
- 水分もとれない場合は、輸液をすることもあります。
- 菌を体外に排出するために、下痢止めや痛み止めの薬の使用は控えましょう。

厚生労働省および国立感染症研究所ではホームページ上で、腸管出血性大腸菌(O157)についてのQ&Aや食中毒の発生状況などの関連情報を掲載していますので、こちらもご参照ください。

アドレス <http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/index.html>
 アドレス http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_g1/k02_06/k02_06.html

オウム病

Q.1 オウム病とはどのような病気ですか。

- セキセイインコ、オウム、ハトなどの鳥類の糞に含まれる病原体を吸い込んだり、口移して餌を与えたりすることにより感染します。
38度以上の突然の発熱、せき、全身のだるさ、筋肉痛、関節痛、頭痛といった、インフルエンザのような症状を来します。
- 早期に適切な治療を受ければ回復しますが、重症になると肺炎や髄膜炎を起こすこともあります。
- なお、この病気は、人から人への感染はまれです。

Q.2 オウム病にかからないためにはどうすればよいのですか。

- 鳥を飼うときは、鳥かごに羽根や糞が残らないように常に飼育環境を清潔にしましょう。
- 鳥の世話をしたあとは、手洗い、うがいをしましょう。
- 口移して餌を与えないなど、節度ある動物との接し方をしましょう。
- 信頼のおけるペットショップで健康な鳥を購入しましょう。
- 飼育している鳥が病気になったときには、動物病院に相談しましょう。

Q.3 オウム病にかかったらどうすればよいのですか。

- 早期に適切な抗生物質を服用することにより回復しますので、鳥を飼育している人が重いかぜの症状を感じたら、医療機関を受診し、鳥を飼育していることを医師に伝えてください。

国立感染症研究所感染症情報センターでは、ホームページ上で、オウム病について解説していますので、こちらもご参照ください。

アドレス http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k01_g3/k01_45/k01_45.html